

再び“維新の波”を迎えて

かごしま 鹿児島市長(鹿児島県) **もり 博幸** ひろゆき
Hiroyuki Mori



維新のふるさと 鹿児島市

「わが前に桜島あり 西郷も大久保も見し 火を噴く山ぞ」

これは、鹿児島出身の作家・海音寺潮五郎先生が詠まれた短歌です。

西郷や大久保が活躍した往時も、鹿児島の街の眼前に鎮座していた桜島。人口約60万人を擁する県都として現在に至るまで、時に噴煙を上げ、いかんともし難い大自然の力を見せつけながら、波静かな錦江湾に抱かれて泰然とそこにあります。

悠久の桜島とその大地のエネルギーに、日本の黎明を切り拓いた英傑たちの熱い志が重ねられていると言われるこの歌を思い出す度に、私は、胸が熱くなります。

そして、西郷・大久保の両雄をはじめ、小松帯刀、島津斉彬、篤姫など、ふるさとが輩



桜島と市街地

出した偉大な先人たちの情熱や、わが国近代工業化の先駆けとなった集成館事業を興した果敢なチャレンジ精神に思いを馳せ、鹿児島

市は、まさに「維新のふるさと」であると、つくづく感じるところです。

来年は、明治維新150周年を迎えます。この歴史的な大きな節目を迎えるに当たり、本市では、全国に先駆けて、カウントダウンの取り組みを進めてきました。

これは、私がかねてから、「維新のふるさと」である本市にとって、明治維新150周年は、まちの魅力を県内外に広く情報発信する絶好の機会であり、また、市民の皆さん、特に若い方々が、郷土に対する誇りや愛着を持っていただく契機にしたいと考えていたことによりです。

24年度から毎年度、近代日本の礎となった150年前の出来事に因んだイベントを開催し、地元の機運醸成を図るとともに、西郷・大久保・篤姫に扮した「薩摩観光維新隊」が全国各地に赴き、「維新のふるさと鹿児島市」を積極的にアピールしています。

今年5月には、20回を重ねた「渋谷・鹿児島おはら祭」に、私も薩摩観光維新隊の皆さんとともに参加しました。渋谷道玄坂で、沿道の方々から例年にも増して熱い声援をいただき、とてもうれしく思いました。

渋谷区とは、この20回記念の祭を契機に、8月、松本市と札幌市に続く観光・文化交流協定を締結し、より一層絆を深めて相互に連携していくことを約束した



「明治維新カウントダウンイベント」の開幕式(大久保利通の銅像前で薩摩観光維新隊の左から西郷隆盛と篤姫とともに。マイク前が筆者)

ところです。

また、昨年度は、薩長同盟150年に当たって萩市と盟約を締結し、今夏、初めて本市の小学生を萩市に派遣して、子ども同士、互いの歴史を学び親睦を深めてもらいました。

このように、先人たちの築いた礎の上に新たな友好と交流の輪を広げています。

大河ドラマ『西郷どん』

年が明けると、いよいよ大河ドラマ『西郷どん』の放送が始まります。

放送開始が近づく中、周囲の期待や機運が高まっているのをひしひしと感じて



今年の「渋谷・鹿児島おはら祭」でもPR（薩摩観光維新隊の左から篤姫と西郷隆盛とともに。右が筆者）

います。

『西郷どん』を意識したイベントなどがニュースで取り上げられない日はなく、また、西郷さんゆかりの観光スポットが既に多くの人でにぎわっているのも、うれしいことです。特に、西郷銅像前は大人気です。休日になると、記念撮影の観光客が絶えることがあります。

ドラマ放送開始まであと3カ月ほどです。放送に合わせて、来年1月に「西郷どん大河ドラマ館」をオープン。また、鹿児島中央駅近くにある体験型歴史ミュージアム「維新ふるさと館」をリニューアルするなど、明治維新を生んだ本市の歴史や文化を存分に楽しんでいただけるよう、着々と準備を進めています。ぜひ多くの皆さんに本市にお越しいただきたいと思っております。

「誠心誠意」

私はかねてから、「誠心誠意」という言葉を胸に刻んでいます。



西郷銅像前で本市のキャラクター「西郷どん」と記念撮影する観光客。カメラを構えるのは、市民の観光ボランティアガイド

西郷隆盛の成し遂げた薩長同盟や江戸城の無血開城なども、複雑に変化する当時の政情の中で、誠意を貫いた先に得られたものだったのだろうと思っております。「黒ダイヤのような」と形容された大きな目を持ち、分け隔てのない丁寧な態度で意見の異なる多くの人の心もつかんだという「西郷どん」が、ドラマの中でどう演じられるのか、とても楽しみです。

ひるがえって、明治維新150周年の熱気も冷めやらぬ平成32年には、東京オリンピック・パラリンピックに続き、本市において国体・全国障害者スポーツ大会も開催されます。また、中心市街地では複数の大



雄大な桜島が見守る「鹿児島マラソン」（平成27年度から開始され、国内外から約1万2000人が参加）

規模な拠点開発が完成します。折しも明治維新から一世紀半の時を経て、まさに第二の「維新の波」といべき好機が本市に到来しています。

人口減少時代に突入し、先行きに不透明感のある状況が続く中、この第二の「維新の波」を最大限に生かし、本市としての強みをさらに打ち出していけるよう、固有の豊かな地域資源に磨きをかけ、観光や教育などに幅広く活用していかなければならないと考えています。私は、市民の皆さんが真の豊かさを実感できるまちづくりの前進に向けて、これからも誠心誠意、取り組んでいきたいと思っております。